

成りたい。思ふことは勝手にあります、自由であります、併しさうは安く卸さぬ、どうしても利益が得られぬ、又煩悶、苦痛、懊惱、心配。人間大抵、内から出る奴は皆制限されてしまふ。けれども私は言ふ、利益とか、名譽とか、戀とか云ふ問題は、人生の心配の中でさう痛切なものでない、其人自身に取つては大切でありませう、其人自身に付ては随分困ることでありませうけれども、人生を通じての心配としてはこんなことはまだく。

人生の中堅となつて、吾々の一代を通じて最も頭を悩ましむる者は何、——所謂生活難の問題、食へないと云ふ問題。諸君、戀が成就しなくとも人間死にはしない、名前が得られなくとも人間死にはしない、利益が得られなくとも人間死にはしない、食へない、是はとも一日も飯を食はずには行けない。明日の煙も立ち兼ねるとなつ

たときに、何の餘裕があつて戀を論じ、名を論じ、利を論ずる暇がある、人生の最も悲痛なる問題は生活難、食へないといふこと。それが若い時分はまだ宜い、二十歳位の時分は宜い。何故宜いかと云ふと、若い時分は前途に希望がある、今は辛い、今は食へないで困るけれども、今に見よ、と云ふ前途がある。私常に言ふのです、諸君が丸の内をお歩きになつて、日比谷原頭電車の交叉する所に、埃に塗れて新聞を賣つて居る人達です。あの中には苦學の青年もある、國より來る學資が無くして、新聞配達に依て學資を得て居る人もある。苦いでせう、砂塗れになつて、二枚で一錢々と賣つて居るけれども、其青年の額には輝きがある、希望の光がある。今は斯の如く埃に塗れ、電車の交叉點の真中に、二枚で一錢々と賣つて居るけれども、今に見よ、他日志の成る時、此大道を自働車を驅つて歩

くの紳士は余の後身なるを知らずや、斯う云ふ希望がある。併しな
がら此今に見よ、果して今に見得るか、二十歳にして見よと云うて、
二十五歳になつて今に見よ、三十歳になつても今に見よ、五十歳に
なつても今に見よ、何も見得ない。それだから生活問題の此苦痛が、
頭にギユツと入込むのは何時頃であるかと云へば、人間四十以上五
十、——所謂中年者でございます。今に見よと云つて居る間に、
出来なくともよい子供は出来た、家計は益々困難になる。曾て青年
時代に、笈を負うて故郷を出た折には大臣宰相となるか、或は富豪
となるか、若くは大學者となつて、さうして故郷に錦を飾る積りで
あつたが事志と違うて、今は僅に三十圓の月給取、或は五十圓の月
給取或は百圓でも宜い、——の月給取、自分の望んだ所と事は違ふ、
さうしてテク、く、歩いて、若い奴にドン、く、後から追越される。青

年時代には希望の光が輝いて、今に見よと言つて居つたが、とうと
う今に見るとは出来ぬ、僅に此月給を離れては他に活路が無いとい
ふことを考へ来るに至つて、翻つて自分の青年時代を考へ、又前途を
望めば、實に秋風落寞として身の消え行くを思はぬ人は少い。日々
の業務を了へて家に歸り、妻君と相對つて、一日の勞を慰せむとす
る晩酌の其一杯の盃を手にした時ホ、ロ、と落つる一滴の涙は、人生
の悲惨を告げ盡して居ると私は考へる、此生活難であります、是は
随分苦しい、けれどもそれは餘り氣が小さい。何ですか三十圓でも五
十圓でも、千圓でも、一萬圓でも、ナ、ニ人間の仕事に尊いとか卑い
とか、そんな區別は誰が附けた。王公宰相となつた者が尊い、車挽
となつた者が卑い、それは小さい眼で見れば卑いに違ひない、小さい眼
で見れば尊いに違ひないが、大宇宙から見ればどの位ある。

此の大宇宙から吾々の此の地球を見ると實に小さいものであります。其地球の上に國を區別して、隣寸函を四疊半に仕切つて茶を立てるやうに、漸々地球の上に區劃をして、是が一國だ。是が一社會だと云ふ、其社會の中に僅か五尺二寸の人間がうよよ集つて、共同生活をしながら何が尊いか。天地の大を以て此人生の小を見るならば、諸君蟻の共同生活を見て、あの蟻が何れが尊い。只吾々は冗談にこんな觀察をするのではない、諸君翻つて見よ、此我が小なる仕事、宇宙の大に比ぶれば實に小なる人間でありますけれども、此小なる吾が營々として其日の仕事をして居るとが、やがて此大なる宇宙に貢献する所以ではあるまいか。時計を御覽なさい。時計の表はたつた二本の針であります、長針と短針と二つの針であるけれども、其裏は小さな器械が澤山寄つて居る、あの器械の中の大いのが尊くて

小さいのが卑いですか。若し大いのが尊くて、小さいのが卑いと云ふならば小さいのがストライキをして運轉を止めてしまへばどうなる、時計の表面はやはり動きはせぬ。吾々人生に大といひ小といふも、尙時計の裏の器械の如く、此小さな一の器械でも、それが運轉が止まれば直に大なる時計の表面に關するが如く、我人生の一舉一動、それが直に宇宙全體に貢献する職務を人間は盡して居るではあるまいか。さう思へば吾が小さな仕事は、決して卑いものではない。私會て斯う云ふ喩を言ふた、喩でありますから全般を盡さぬけれども、車に乗つて官員さんがお歩きなさる、堂々と髯を生やして意氣昂然と乗つて入らつしやる、車屋が汗を流して挽いて居る。人見て、乗る者は尊くして挽く者は卑いと云ふ。成程さうかも知れませぬけれども、あの官員はどうしてあんなに威張れるのか、あれは月給を貰

つて居るから威張れる。一文も月給を貰はぬとなかく、あんな顔は出来ぬ、勿論其月給の中から支拂つて車に乗つて居る。其車屋の方を御覽なさい、車屋は車を挽いて居るけれども、税を納めて居る、幾らか税を納めて、其税が旨く廻つて大藏省とか何とか云ふ處へ行つて、くるつと廻つて官員の懐中から出て来るから威張つて居る、あれを直接に車屋が官員に渡すと餘り威張れるものでない。此處が社會の組織の妙なる處、實に圓滿に廻つて居るのであります。

さう云ふ工合に考へて見ると、人間の仕事は自分の所謂天稟、――斯の如く成り來つた仕事に向つて所謂ベストを盡す、最善最良の心を盡す、至誠を以て其仕事をすれば、それが眞に尊い人間と云ふことが出来やうと思ふ。人の仕事に尊い卑いと云ふことはない、唯其人の精神、其人の思想が、仰いで天に恥ぢず俯して地に辱ぢず其仕

事に於て最善最良の技能を盡し、精神を盡して行くなれば、眞に尊い心持といひ得るだらうと思ふ。我仕事が何故に卑い、自ら卑んで人之を賤む、成程己はさう考へて居るけれども、外の奴に何とか言はれると癢に觸る、己の鼻なんか随分口が悪くて、貴方と一緒に卒業したあの人はもの二千圓の月給取、貴方は三十圓では少いぢやありませんか、さう言はれるのが嫌だ、又朋友の評判も嫌ぢやないかと云ふのが、今度は他の爲に心を勞する。他の爲に心を動かさるゝ者は決して大人物ぢやない、毀譽褒貶何かあらん、それは向ふの人が勝手に言ふのだ。自分には少しも關係しない。あの人が斯う云ふ、人我を褒むれども一絲を加へず、人我を誹れども一毫を減せず、あなたの背が高いと言つても、別に高くなつた譯ぢやない、所が兎角高いぞと言はれると、高くなつたやうな氣がする、人が言ふ毎に其

爲に動かされるやうなことで、所謂精神修養は出来るものぢやない。
行誠上人の歌に

こりすまに打ちは寄せても岩が根に

おのれ碎けてかへるあだ波

波がドンと寄せる、谷川の小さな石を御覽なさい、小さな石はごろごろと下の方に流される。所謂世の中の自ら守る所なき輕薄才子が、浮世の潮流に流れて行くやうに、谷川の小さい石は水にごろ／＼流されるけれども、自ら信ずる所のある、大人物的大きな石は、懲りすまに打ちは寄せても岩が根に、おのれ碎けてかへるあだ波で、じつとして居るから何も仕方がない、波の方がかへるところぢやない、或人が斯う云ふ事を言つた。谷川の小さな石は下へごろ／＼流れて行くが、大きな石は却て上へ流れて行く。どう云ふ譯でありますか

と聞いたたら、斯う教へて呉れた。谷川は下が砂地でありますから、ドンと波が當る、當つては返り、寄せては返る、段々岩の根が掘れる、根が掘れると此石何方へ引繰り返る、上流の方へごろ／＼と行く。斯して段々上流へ行く。自信の無い人間は、他の爲に動かされて下へ流れて行くけれども、自ら信ずる所のある人間は、却て社會をして地位を作らしめる者である。即ち此信仰の上に立つて、毀譽何かあらん、褒貶何かあらん、茲に心を一つ押付けて、さうして自分の守る所を守るならば、何の心配がありませんか、何の煩悶がありませんか、古人が、人が心配を無くすには唯一を守れと云ふ、生と死との二つを追から、生る方が宜くて死ぬ方が嫌になる、苦樂と云ふから、苦が嫌になつて樂がしたくなる、苦樂も一如と云ふ所に眼を付けて見ると心配は無い。前に言ふた名が欲しい、是も宜、さて今度

名譽を得たら樂になるか、名前が欲しいと心配して名譽を得ると、今度は失ふまいと心配になる。あゝいふ女を妻君にしたいとおもふ、それが妻君になつたらどうなる、心が移りはしまいかと云ふので何時も心配して居る。だから妻君は餘り別嬪を持たぬ方が宜い、と或人が言つた、私が言ふのぢやない、金でもさう利益が得たい得たいと思ふが、利益を得たらどうだ、今度は失ふまいと思つて心配。——觀じ來れば苦と云ひ樂と云ひ、只一つの事である、其本一つであるといふ事を見よ、苦樂は一如であります。さう云ふ風に、人生の仕事は皆二途を追ふものですから、そこで迷を生ずる、宇宙の現象は個々差別であるが、其の本體は一、其本體は一であると云ふ所に心をビタリと押し付けると、八風吹けども動せず、如何なる事があつても其爲に心配する事が無くなる。——其點なのです、

——一を以て宇宙の道理を達觀し、其歸一する所に心を据ゑると云ふことが、安心の秘訣であると思ひます。然らば其の一とは何であるか、少し話がむづかしくなりますが、此の宇宙の當相を見ますると森羅萬象、個々差別で、一々擧げて數へることは出來ないのでありますが、異中に同を求めて見ると、我と我でないもの、即ち我と非我との外はないのです。我と非我といふと何だかつまらないやうですが、哲學者の使ふ語でいへば主觀と客觀です、即ち宇宙萬象を二つに分つと主觀の我と客觀の非我となるのです、其の主觀と申すのは、われ／＼の心の方に屬するので、客觀といふのは心以外の一切のものですから、これを又精神と物質、心と物との二つと見ても差支はない、さて其の物の方即ち客觀界を見ますると、此の世の中には一つも同じものはなく、一葉頭上の露

も露さま／＼の姿あり、滿眸白皚々たる雪も、一片づゝ其の姿が違ふ、

芳野山霞の奥はしらねども

見ゆる限りは櫻なりけり

といふた、其の櫻の花も、皆な決して同じではない。學問上で同じといふことの出来るものは同時に同所に同一状態であるものでなければならぬ、同じものなら一つだ、異ふからいろ／＼ある、かくの如く宇宙の當相は悉く異つて居るのであるが、それは唯だ姿の上のこと、其の本體はといふと皆な同じものであります、如何に姿は異つても櫻は櫻、雪は雪、露は露です、峯に生ふる松の木と、野に咲く艸花とは違ふことは違ふが植物たるに於ては一、空飛ぶ鳥と、野を驅ける獸と同じではないが動物たるに於ては異るところはない、

否、其の植物も動物も生物たるに於ては同じものであります、イヤそればかりぢやない、此處に話をして居る私と、此の前にある花瓶とだつて全く異なるものぢやない、此の花瓶は何んで出来てますか、云ふまでもなく土でせう、此の私は何を食つて生きて居りますか、米です、其の米は何によつて育つか、土でせう、然らば米は土の子、私は土の孫、此の花瓶は土だといふに於ては、今でこそ姿は變つたが、遠き昔はお互に土の仲間であつたと握手することが出来るのでありますまいか、これを天地同根萬物一體の理と申すので、宇宙萬象の異なるのは其の相即ち姿の上のこと、其の本體に遡つて見れば一つであるといふことは此の一つの譬喩でも會得することが出来る話であります、

雨霰雪や氷とへだつれど

とくれば同じ谷川の水

イヤ、

如何なれば雪や氷とへだつらん

とけぬも同じ谷川の水

です、われ／＼の見まする所の客観界は其の相こそ異なれ其の本體は一つです、さて主観界即ち精神の方は何うかといふに、心の門は五つあつて眼、耳、鼻、舌、身、これが外界に對して色、聲、香、味、觸と心の中へ入るのでありますが、決して別々になつて居るのではない、悉くこれが意識によつて統一せられ、其の意識の上に波立つさま／＼のことも亦これ我といふもので一つにせらるゝので、微細に心の作用を申しますれば、こゝに花を見て居る、これを見るのは眼識の働きですが、見て居ると知つて居るのは意識、其の見て

居るのは誰でもない、自分だと知るのが自我の觀念、更らに其の奥にこれは自分が見て居るのだと知る作用があるので、佛教の方では、之れを相分、見分、自證分、證自證分などと別つていろ／＼詳しい説明をするのですが、それはこゝに略するとしても、われ／＼の精神界がチャンと一つに纏まつて居るといふことは明かであります、これが一つに纏まつて居らねば氣違ひ同様で、萬事が無茶苦茶になつてしまふ、それが無茶苦茶にならぬのは一つに纏まつて居るからであります。

かくの如く主観界も客観界も、其の本源に至ると一つに纏まつて居る、更らに一步を進めて考へると此の主観の心といふものと、客観の物といふものとは二つ別々なものであらうか、一つなものであらうかといふ大問題となるのですが、これは何にも面倒臭く主観の、

客觀のと云ふには及ばぬ、手近い所で我が此の身體からだと心とは二つなものか一つなものかといふことを究むれば明かになるので、身體は云ふまでもなく物質に屬するもの、心は云ふまでもなく精神に屬するもの、此の二つを全く別々のものとするれば、身體が病氣であるからといふて心が面白くなる筈はなく、心に煩悶が断えぬからとて飯めしが食へぬといふ筈はない、心は心で勝手に煩悶せよ、身體は身體で勝手に飯を食ふ、身體は身體で勝手に病氣をせよ、心は心で勝手に面白がるといふ、ことも出来る筈だが、實際はさうでない、身體は精神に影響し、精神は身體に影響し、此の二は二つにして一つ、決して離れらるべきものではない、これを佛教の方では色心不二といふので、此の二つはまた根本の一つのものによつて統一せられて居るといふことは争ふべからざる真理であります。私の一といふの

はこれです——。此の主觀客觀を貫通したる一つです、——吾等の心の奥底と宇宙の本體と脈絡貫通して居る此の一つです、此の一つを徹見し、此の一つの上に立つて、初めて他の爲めに動かされない大安心を得ると思ふのであります、自他の他だのといふ差別を立つるから他の毀譽に動かされるのです、自他の本源一なるを見れば何の處にか動かさるゝ所がありません、況んや其の差別の上についた毀譽とか褒貶とかいふことは、たいこれ流れに浮ぶ水沫うきかたの泡です、飄つて自分の方を見ても、自他の差別を立て、好悪の考を起すから慾望の爲めに心の波を立てるのですが、此の本源の一の所に安立して、それを以て心の主人公として居れば、何の煩悶も起るべきではないのです、これ此の心の主人公これが宇宙の本源と脈絡貫通して居る眞の我です、常に此の眞の我を心の全面に出して行く時は、宇宙は

打して我と一となつて、眞に人生を達観することが出来るのです、吾等の心配は差別に執着するから起るのです、小事に離解するから出来るのです、心を此の一如平等の境に置いて人生を達観する時は心配になるべきことはないのです。調心の術と申しても別の方法はなく、安心の訣といふことも他の手段はない、唯だ此の心の主人公、即ち眞の我なるものを徹見して常に心の全面に出すことであります、一體われ／＼の心といふものは常に優勝劣敗の理法に制せられて生存競争をして居るもので、常に強い觀念が弱い觀念を制伏しつゝあるのでありますから、此の主人公を弱はめると他の觀念が跳梁跋扈して終には御家に悪臣蔓り御主人はどこへやら逃げ出してしまふのでありますから、此の御主人を失はぬやうに、否な此の御主人が常に強者となりて他の觀念を統一して行くやうにするのが最も必要で、

それには坐禪とか靜坐とかの工夫が一番大切であります、即ち心を落ち着けて其の本源を見究めるのです、さうして此の見究めたる心の本源——一如平等の境に立脚して萬事に接する時は、外境の爲めに心を制せらるゝとはなく、心を以て外境を制して行くことが出来るのでありますから、つまらぬ煩悶や懊惱は、朝日に向ふ草の葉に置く露の如くに消えてしまふのであります。私が安心の訣として御話し申すことは此の外にはありません。否、先聖古賢の示された所も、大體に於て此の點に歸すると思ふのであります、われ／＼の心配は心の動搖から起るのですが、心此の一境にあれば動搖することはありません、われ／＼の心配は目前に離解して全體を達観することが出来ないから起るのですが、心此の一境にあれば目前の小事は、唯だこれ現象差別の影なることを認むることが出来ます、われ／＼

の心配は他によつて來るのですが、心此の一境にあれば自他平等、何をか愛し、何をか憎むべきといふ大きな心に居ることが出来るのであります、此の大きな心これ眞の我です、心此處に安住して初めて自家の權威に立つて自家の權威を行ふことが出来るのです、自家の權威に立つて自家の權威を行ふ、男兒これより壯快なことはござりません。徒らに他の權威に屈従しようとするから、心配が斷えないのですが、自家の權威に立つて自家の權威を行ふ何の不快がありません。かく云へばとて私は何にも自分勝手に我儘をせよといふのではない、他も亦自の一部分、萬境も亦自家の所屬、自を見る如く他を見て行く所に大なる我はあるのです、世の中に自分のことだけを考へて家族のことを思はぬ人は極く極く下劣な人であります、家族を思ふこと自己の如くになると、一家の主人としては立派なも

の、併し一家のことのみを思つて國家社會のことを思はぬ人は決して立派な人とは云はれぬ、國家社會を思ふこと自己の如くなる、否更に一步を進めて自己と宇宙萬象とか一枚となると、宇宙雙目なく乾坤唯だ一人、これ此の時自家の權威は宇宙の權威なり、自家の行動は即ち神の行動なりといふ根本に入るのであります、古哲の語にも「佛法を學ぶとは自己を學ぶなり、自己を學ぶとは自己を忘るゝなり」といふのがある、此の自己を忘れたる所に大なる自己は顯現し、敢て他に慢せられざる眞の自己を現はすことが出来るのです、大なる哉、我、天地と一たり、乾坤と同化す、こゝに安心の境あり、解脱の域は存するのです、これ此の時、心を求むるに不可得なる眞の安心を得らるゝのであると思ひまして、くだくしくも、こんな御話をいなした次第であります。

(講演筆記)

禪門要訓

坐禪の宗門

聖一國師いふ。

夫れ坐禪の宗門といふは、大解脱の道なり。諸法は皆な此の門より流出し、萬行も皆な此の道より通達し、智慧神通の妙用も此の中より生じ、人天の性命も此の中より開けたり。故に諸佛既に此の門に安住し、菩薩も亦行じて此の道に入る、乃至小乗及び外道も行すといへども、未だ正路にかなはず、凡そ顯密の諸宗も此の道を得て自證とす、故に祖師の曰く、十方の智者皆な此の宗に入ると宜へり、

と、禪門を以て諸法の根本とす、師又其の義を説て曰く

禪とは佛心なり、律とは外相なり、教は言説なり、稱名は方便なり、これらの三昧みな佛心より出でたり、故に此宗を根本とするなり、

と、其の義如何、更にいふ、

自心是佛なり、此外何をか靈徳とせん、自心を覺了せんより外、何の證據をか求めんや、

と禪の究竟目的は自心を覺了するにあり、自心を覺了する所に安心あり、解脱あり。

禪の要義

禪の要義は人々個々の本心を徹見するにあり、古聖之れをいふこと多し、今擧ぐるものは其の二三のみ、
祖佛の本意は皆な心を明め道に達せんが爲めなり。假りに文義を

以て直に心源を指す、豈に詮を執つて旨に迷ひ心に背きて道を求むべけんや。(宗鏡録)

禪宗は教外別傳、不立文字といふて教へもせず、習ひもせず、人生れ得たる道理のまゝなり、これを本來佛ともいふて本來具足したる道理なり、教なくして本心の道理は悉く埒の明きたるものなり。水は冷かに火は熱く、呼べば答ふ手足の働きまで、自ら習はずして知れたるものなり。(大道法語)

禪法とて始めて立たる宗なし、只諸の衆生一源の本心を指して宗とす、此の心即ち佛性なり、是の性を知るを修行とす。(和泥合水集)

禪の一宗は自から其の本心を完うするにあらずといふことなし。

(禪除外集)

祖師の西來は法の傳ふべきありて以て此に至ると爲すにあらず、但だ直に人心を指して見性成佛せしむ、豈に門風の尙ふべきあらんや。(宗門十規論)

他人の力

拔隊假名法語にいふ、成らんと要すれば自來り、問んと要すれば自ら問ふて他人の力によらず、佛祖の教を聞かず此の心便ち教外別傳不立文字の全體なり、此の心便ち如來の清淨禪なり。

昭々靈々たる一物

曹谿退隱老師の「禪家龜鑑」の劈頭にいふ、「一物此にあり、本より以來昭々靈々として、曾て生せず、曾て滅せず、名くることを得ず、状することを得ず」といひ、これを説きて

一物といふは何物ぞ、古人頌に云ふ、古佛未生前、凝然一相圓、

釋迦猶未會、迦葉豈能傳フニキと此一物の會て生せず會て滅せず名狀するを得ざる所以なり、六祖、衆に告げて曰く、吾ウに一物あり無名無字、諸人還て識るや否やと、時に神會禪師出で、いふ諸佛の本源、神會の佛性と、これ六祖の孽子たる所以なり、懷讓禪師、嵩山より來る、六祖問ふ曰く、什麼物か什麼ニに來ると、懷讓、措くことなく八年に至て方に自ら肯きて曰く説似一物即不中と、これ六祖の嫡子たる所以なり、三教の聖人此の句より出づ、誰れか是れ、舉するもの、眉毛を潜取せよと、一物を説似すれば即ち中らず、此の句義眞に深し、

風なきに浪を起す

退隱老師又いふ、佛祖の出世、風なきに浪を起すと、註していふ、佛祖とは世尊迦葉なり、出世とは天然を體と爲して衆生を度する

なり。然るに一物を以て之れを觀る則ち人々の面目、本來圓成豈に他人の脂を添へ粉を着くるを假らんやこれ出世の波浪を起す所以なり、虚空藏經に曰く、文字は是れ魔業、名相は是れ魔業、佛語に至ても亦是れ魔業と、これ此の意なり、此には直に本分を舉す、佛祖功能なし

乾坤失色、日月無光

と禪の妙味、此の中にあり、能く之れを看取するを要す。

文字と禪

禪家の文字は醫家の砒霜烏喙の如し、便成和尚語録の序にいふ、我が宗は語言文字に資ることなし。然れども語言文字を廢することを得ず、猶ほ醫家の砒霜烏喙を排斥すること能はざるが如し。故に其の善く用ゆるものは人を活かし善く用ゐざるものは人を殺す、

殺活の際、髪を容ること能はず。蓋し毒藥の用の難きや久し唯だ其の醫の良不良に在るのみ。

大綱禪師の語録にいふ、

我が此の宗乘は文字に黏せず、經論に拘らず、唯だ純一に心法を咨決せんことを要す心法を決せずして。縦ひ妙言妙句を吐くも皆なこれ野干鳴となる、若し能く心法を決せば語默動靜、俱にこれ獅子吼となる

生 死

生死一如の觀は佛教の根本、禪に於ても然るは云ふまでもなし、

鼓山晚錄にいふ、

夫れ生あるものは必ず死あり、これ固に人の共に知る所なり、但だ未だ生じて嘗て生せず、死して未だ嘗て死せざるものあるとを

知らず、是れ乃ち水火の能く劫する所、刀兵の能く傷くる所にあらざる者あり。譬へば鏡影は往來しても鏡體は動せず海波は起伏しても海體は常に安きが如し、其の常安不動の體に達する時は則ち彼岸に超登し、其の往來起伏の用を執する時は、則ち流浪窮らすと、簡にして頗る要を得たり、又いふ、

人の生死あるは猶ほ日の晝夜なり歳の寒暑あるが如し、故に生も以て慶となすに足らず、死も以て悲と爲すに足らず、重んずる所は生じて能く其の生を善くし、死して其の死を善くするに在り、則ち大智慧大主量を見する者にあらずんば能はじ

と、生にあつては生を善くし、死にあつては死を善くす、これ丈夫世に處するの道なり。

坐 禪 箴

宏智禪師、先きに坐禪箴を作りて禪者修行の要訣を示す 後に道
元和尙あり、又坐禪箴を作る、何れか尤も要なる、刮目して見よ、

宏智禪師坐禪箴

佛佛要機、祖々機要、不觸事而知、不對緣而照、不觸事而知、其
知自微、不對緣而照、其照自妙、其知自微、曾無分別之思、其照自
妙、曾無毫忽之兆、曾無分別之思、其知無偶而奇、曾無毫忽之兆、
其照無取而了、水清徹底兮、魚行遲々、空濶莫涯兮、鳥飛杳々、

道元禪師座禪箴

佛佛要機、祖々機要、不思量而現、不回互而成、不思量而現、其
現自親、不回互而成、其成自證、其現自親、曾無染汚、其成自證、
曾無正偏、曾無染汚之親、其親無委而脱落、曾無正偏之證、其證
無圓而功夫、水清徹底兮、魚行似魚、空濶透天兮、鳥飛如鳥

悟道雜話

自己の本性を徹見して宇宙の靈機と合致するの妙境、言以て傳ふ
べからず、文以て示すべからず、大聖釋尊、菩提樹下に端坐して臘
八の明星燦として光るの刹那、豁然として大悟したまふ、歴代の
祖師悟道の機も亦此の妙義なり、左に掲ぐるは其の二三のみ。

福州の靈雲志勤禪師は桃花を見て大悟し、迺ちいふて曰く、三十
年來、劍客を尋ね、幾か葉を落し又枝を抽くに逢ふ、自ら一たび
桃花を見て爾後直に如今に到つて更に疑はずと、

鄧州の香嚴閑禪師、一日、山中に草木を艾り除いて瓦礫を以て
竹を撃つに聲あるを聞て思はず失笑し、廓然として大悟す、偈を
述べていふ「一撃に所知を忘す、更に修治を假らず、所々に蹤跡
なし、聲色の外の威儀云々と、

僧あり、知門詐禪師に問ふ、蓮花未だ水を出でざる時如何、師いふ、蓮花、僧いふ、水を出でざる時如何、師いふ、蓮花、僧いふ、水を出で、後如何、師いふ、荷葉と、僧悟る所あり。

百丈和尚、一日、馬祖と遊山す、馬祖、野鴨子を見て問うて曰く、これ何ぞ、百丈の曰く野鴨子、祖いふ、何の處にか去る、丈いふ、飛び過ぎ去る、祖、手を以て百丈の鼻頭を捻る、百丈痛む聲をなす、祖曰く何ぞ曾て飛び過ぐると、百丈是に於て大悟す。

雲門禪師、睦州禪師に參して門を叩く、州捕へて曰く、道へ道へと、門驚いて答ふるに暇あらず、州之れを押し出して曰く、秦時の轆轤鑽と、其の扉を掩うて雲門の足を損ず、雲門此に於て省あり。

若し夫れ大悟徹底したる祖師の對話に至つては到底情識の思量し

能はざるものあり、請ふ左の數個の話頭に見よ。

香巖、一日、衆に示して曰く、人の樹に上りて、口に一樹枝を嚼み、脚枝を踏まず、手、枝を攀ぢず、忽に人あつて、此の人に祖師西來の意を問ふが如くんば、若し他に答へば即ち身を喪ひ命を失はん、他に答へずんば又他の問ふ所に違はん、と、時に虎頭上座といふものあり、出ていふ、樹上をば即ち問はず、樹下の一句道ひ將ち來れと、香巖呵々大笑す。

瀉山の祐禪師、仰山と遊行す、偶ま鳥の一の红柿を嚼んで師の前に落すあり、師、之れを仰山に與ふ、仰山之れ得て水を以て洗うて師に與ふ、師の曰く子、甚麼なの所よりか得來ると、仰山いふ、こはこれ和尚の道德の感する所なりと、師の曰く、汝も亦空然たることを得ずと、即ち一半を分つて仰山に與ふ。

撫州の石鞏惠藏禪師、常に弓箭を以て人に接す、三平和尙到る、師、例の如く弓を挽く勢ひを爲して曰く、箭を看よと、三平避くる状を爲す、師の曰く平生一張の弓、一隻の箭を架して只だ半個の聖人を射得たりと、

大隨の眞禪師、庵の側に一匹の龜あり、僧の其を指して問ふ、一切衆生は皮、骨を包む、這の衆生甚の爲か骨、皮を包むと、師草鞋を拉して龜の背上を掩ふ。

法眼禪師、手を以て簾を指す、時に二僧あり、同じく去つて之れを捲く、師曰く、一得一失と。

杉山の賢禪師、歸宗、南泉の兩禪師と遊山し、途に虎に遇ふ、後に南泉、歸宗に問ふ、先きの虎は何に似たると、歸宗いふ、猫兒に似たり、歸宗又賢禪師に問へば狗に似たりといふ、歸宗更に南

泉に問へば、大蟲に似たりといふ、

本心の歌

盤珪禪師に本心の歌あり、修道の心得を説盡して頗る平明、

不生不滅の此心なれば

地水火風は假の宿

かりの火宅に心をとめて

われからもやして身をこがす

生れ來りし古へとへば

何も思はぬ此心

來るが如くに心をもてば

直に此身は活如來

おしやほしやと思はぬ故に

今は世界が我が物じや

金をもつたりや貧者がいやし

もたぬ昔をわすれたか

戀しゆかしも唯今ばかり

逢はぬ昔をわすれたか

惡をさらふを善じやと思ふ

さらふ心が惡じやもの

うれし目出たや老せぬ君に

めぐり逢ふたり唯ひとり

奇妙不思議は一つもないぞ
 後世をねがふとて最負をねがふ
 安養世界はこゝじやもの
 有爲の轉變我が爲す事を
 無爲の心はもとより不住
 過去も未來も只だ心ばかり、
 心とめすば浮世もあらじ
 不生不滅の此心なれば
 假の火宅に心をとめて
 夢と思へば浮世の中は
 むかしおもへばゆふへの夢じや
 うそな世界をまことのやうに
 知らじや世界が皆不思議
 いとゞ我慢をそへてかし
 五萬々々のおくはなし
 知らで迷うて身の最負
 知らで迷ふは我が損よ
 心留むより思ひきりやれ
 峰の松風まつへ吹く
 地水火風はかりの宿
 我ともやして身をこがす
 うさもつらさもなきものじや
 とかく世界は皆うそじや
 化しばかざるばけものじや

いつか五欲を身にならして
 人にをしへはもとないものじや
 年はよれども心はよらず
 佛道修行つとめし後は
 迷ひ悟りはもとないものじや
 後世のつとめも此頃いやと
 さとる心を我じやとおもへ
 さとろくと此頃せねば
 よきもあしきも一つにまるめ
 死んで世界を夜盡くらせ
 とかく浮世はもとないものじや
 それにならうて目をくらす
 是非を争ふ我身なり
 常にかはらぬ心のこゝろ
 何もかはりは得ぬものぞ
 親もをしへぬならひもの
 出入の息のあり次第
 念と念とですもふとる
 朝の寢覺も氣が軽い
 紙につゝんで捨ておけ
 それで世界が手に入るぞ
 心止めより唯だうたへ

蕉雨餘滴

秋風、芭蕉を破り、秋雨之れを洗ふて點滴聲あり、靜に古書を繕いて閑寂を味ふ、抽亂讀倒の如く、亂抄亂出亦例の如し、感興を共にする人あれば更に妙なり。

見聞の佳境

石天基の「快樂豫」に見聞の佳境を擧ぐ、「人樂心を具して眼を開けば俱にこれ美景、若し目を閉づれば冥靜更に多きなり」とて其の見る所の心と樂ましむるものを列擧して、

- 看得意書 看山水 看農務 看桑麻 看採樵 看垂釣 看書
- 看筆硯精良 看日光初出 看夕陽返照 看明月 看雪 看浮雲變幻
- 看晚霞 看雨滴花塔 看雨後新綠 看楊柳舞風 看花色鮮媚

看蝶戲花叢 看風荷舒卷 看梅 看流泉 看風帆 看劍
更に耳に入るの快を示して「心中快樂なれば何の聲に拘らず、耳に入る皆佳なり、即ち或は寂靜として萬類の聲なき其の樂更に甚し」といひ、

- 讀書聲、桔槔聲、紡織聲、欸乃聲、牛背笛聲、伐木聲、採蓮歌聲、小兒聲、月下歌聲、雪灑窓聲、鐘聲、風聲、泉聲、濤聲、溪聲、鳥聲、松聲、子規弄晴聲、遠村雞犬聲、竹聲、夕陽蟬聲、蛙鼓聲、蚓曲聲、雁聲、鶴聲、酒槽滴聲、四壁虫聲、鶯聲
- を列擧す、人々趣味異り、好む所必ずしも一ならざるも、これらの詩境舉目入耳、快ならざるはなし、

佳主佳客

同書に理想の主人と客とを擧ぐ、又頗る興味あるを覺ゆ、即ち賢

主としては、

齋無俗物、爐香不冷、不厭供應、
 門公解事、床頭出新釀、出異書寶、
 虛心謙婉、飲饌修潔、具箋待吟、
 不强人酒、傾略清趣、不著惡犬、
 佳賓としては

忘機、口不言錢、不借書、不談俗事、隨意書畫、多心、不証違
 事、諧培花法、不較量飲食、不責苛禮、異事、不持相儀、不
 求主人、問奇、不薦術士買客、博學不矜傲、雅量、不離市價、凡
 事讓入、隱惡揚善、不自大、無塗案、壁傾、茶餅、酒路、思慮
 と、略は我が意を得た。

讀書と涉世

同じく石天基に讀書文人二十四戒あり、世の讀書子を警覺するこ
と多し、曰く

- 不可志念分岐、不可粗心浮氣、不可始勤終怠、不可一暴十寒
- 不可貪多務博、不可姑待明日、不可畏難畏學、不可恥問自是
- 不可濫交應恥、不可輕師遠訓、不可談說閒話、不可管理閒事
- 不可得少自盡、不可多習雜技、不可繁累俗事、不可惜錢買書
- 不可代寫詞訟、不可下筆傷人、不可編造歌謠、不可將書爲枕
- 不可作賤字紙、不可榻壁塗案

附言していふ「以上の諸戒は獨り文士の爲めに然るのみならず、
 即ち農賈雜技修仙學佛の者も義俱に此に通ず。各々一紙を坐右に粘
 して時に警心を加へ。病症を去れば功自ら成る云々」
 別に涉世の十法あり、曰く

寧靜是養心第一法、寬容是待人第一法、
 謙謹是保身第一法、安詳是應事第一法、
 存厚是召福第一法、寬慈是延壽第一法、
 讀書是廣智第一法、勤儉是治生第一法、
 知足是享樂第一法、慎交是遠害第一法、
 と、皆な服膺すべし。

道德の方劑

梁の武帝、志公に問ふ、如何に修行せば、永劫に人身を失はざるを得んやと、志公答へて貧道に一の藥方あり、五蘊山中に往て採取せよと、其の藥方にいふ

- 不瞋心 一具 常歡喜 二兩
- 慈悲行 三十 忍辱根 四握

精進意 六分 除煩惱 七顆

善智識 八分

右の藥を聰明の刀を用ゐて平等の砧上に向て細かにたくり、人我の根を去却して無碍の臼の中に入れ、金剛の杵を以て搗つと一千下し、波羅密を用ゐて丸と爲し毎日八功德水を取つて一丸を服すれば永劫に人身を失はざるべし
 と、もとより後人の假托に出でたるなるべしと雖も、道德の要殆んど此の方劑に盡く、

克己銘

宋の呂與叔の克己銘は吾等が自警の箴たり。呂與叔は禪に參じ儒を學び造詣頗る深く、言簡にして意深し、凡そ厥の生ある氣を均うし體を同うす、胡爲ぞ仁ならざる、我れ

則ち己あればなり、物我既に立て、私に町畦を爲す、勝心横に發して擾々として齊しからず。大人は誠を存す、心に帝の則を見る、初より客驕の我が誣賊たることなし、志は以て帥たり、氣は以て卒徒たり、辭を天に奉く、誰が敢て手を侮らん、且つ戦ひ且つ徠る、私に勝ち慾を望く、其は寇讐たり、今は臣僕、其の未だ克たざるに方りて、吾が室廬を窺ひ、婦姑勃睨せば安ぞ、厥の餘を取らん、亦已に之れに克たば皇々として四達し、洞然たる八荒皆な我が圍に在り、孰か天下吾が仁に歸せずと云はん、瘡痍疾痛、舉げて吾が身に切なり、一日焉に至れば、吾が事にあらざることなし、顔何人ぞや、之れを睇へば則ち是なり。

釋迦何人ぞ、達磨何人ぞ、孔孟顔回抑も吾と何の異ぞ、能く己に克つの工夫を學は、希くば至らん。

秋風髯を剪る

曾て秋風髯を剪るの記を作りて自ら其の愚を語る、俗氣胸に滿ち、街氣未だ全く去らず、笑ふべきか、悲むべきか、

「瘦る身をさするに似たり秋の風」吾、秋の初めに病みて、蒲柳先づ零む蕭瑟の風に心を痛ましむること深し。獨り欄に倚りて我が髯を撫すれば數莖の霜、老の來るを覺ゆ。

自ら想ふ、我れ、未だ不惑、人生爲すある正さに此の後に屬す。而して自ら老を想ふ。これ自ら凋落せんとするなり。江湖に落拓すること四十年なりと雖も、事業未だ成らず。志すところ多く前程にあり、壯志未だ銷せず。唯だ此の白髮に對す、孤影颯然として身の消え行くを見るに堪ざらんや。仰げば一聲の白雁、雲に入つて悲しく、俯せば半砌の黃花、石と同じく瘦す。

四十にして惑はざるは聖賢の事、我は尙ほ惑へり。惑ふものは前程幾分の餘地あり。吾は此の餘地に於て志す所を遂げんとし、常に身の消え行くを知らず、家に双親あり、幸にして健、老萊子の行を學ぶにあらねど吾は自ら青年に伍し青年の事を行はんとす。然かも我が髯は我が眼に入りてしばし心を痛ましむ、吾をして意志弱しといふ勿れ、吾、我が髯を見ずんば、吾我が老の至るを思はじ。老の至るを思はずんば我が意氣も沮まじ、吾何を好んで我を悼ましむるの髯を蓄へて、獨り自ら悲まん。

斷乎、刀を執つて我が髯を斷たんとすれば、髯は我を嘲りて其の愚を憫み、十有餘年、標象となりて我を聯想せしめ、幾多の便宜を自他に與へしもの、今何の罪あつてか之れを棄つる、斷ちたる髯は又生ゆべし、汝、抑も其の間に何事をか成し得べきといふ、

刀を抛てば數莖の銀色、我が前にあり。凋落の氣人を襲ふ。よし、さらば汝の復た來るに任せん我は少時汝と別れて、行く秋の憂さを忘れん。

壯志を沮むものは觸目の光景なり。人間常に青年の意氣あるを要す。我、今、髯を剪る。笑ふに似たる悲痛なり、銀髯、頬に滿つるの前、果して能く青年時の所期を遂げ得べきや。心は境によつて轉ず。若し此の浙瀝窓を打つの風をして、水を吹て、綠參差たらしむるを得ば、秋風髯を剪るの焉ぞ我をして捲土重來の好紀念たらしむるものあらざるを知らん。

莫妄想、莫妄想、今にして想へば實にこれ痴人の痴事たりし。

此の一日

雲棲寺每晚の警語にいふ。

是○日○已○過○、命○亦○隨○滅○、如○少○水○魚○、斯○有○何○樂○、大○衆○當○勤○精○進○、
如○救○頭○燃○、但○念○無○常○、慎○勿○放○逸○、

と、これ無常を念じて放逸を避けんとするもの、達者又達者の語あり、陳眉公いふ、

過○去○事○已○過○去○了○、未○來○不○必○豫○思○量○、

只○今○只○享○只○今○樂○、一○枕○南○窓○午○夢○長○、

と、孰れかこれ是、孰れかこれ非、若し一枕南窓午夢長しの境を得ば、是の日已に過ぐる又何かあらん。鶴林玉露更に穩健の語を擧げていふ、

世○に○住○す○る○一○日○な○れ○ば○則○ち○一○日○の○好○人○と○な○ら○ん○、官○に○居○る○こ○と○一○日○な○れ○ば○則○ち○一○日○の○好○事○を○爲○さ○ん○、

と、蓋し名言なり。

座右銘

伊藤東涯は篤學の士なり、其の座右の銘は日々反省の則を説き簡にして要を得たり、以て後學を啓發す、其の文にいふ、

跬○步○も○爾○の○所○生○を○忘○る○べ○か○ら○ず○、一○日○も○爾○の○所○職○を○曠○う○す○べ○か○ら○ず○、所○生○の○恩○は○天○の○如○く○、天○を○忘○れ○ば○斯○身○に○覆○る○、所○職○は○惟○れ○身○の○本○、本○を○忽○に○せ○ば○命○必○す○極○る○、惟○れ○吾○が○言○に○あ○ら○ず○、寔○に○帝○の○則○な○り○、此○を○以○て○君○に○事○へ○ば○則○ち○忠○臣○た○り○、此○を○以○て○人○に○交○れ○ば○則○ち○德○を○失○は○す○

高を究め深を探れ

白隠和尚は近代の高徳なり、曾て自ら誓つていふ、
大○丈○夫○學○ば○す○ん○ば○則○ち○已○む○、若○し○一○日○も○學○ぶ○と○な○ら○ば○高○を○究○め○深○を○探○り○て○、誓○つ○て○人○道○の○源○底○を○徹○し○、人○欲○の○私○を○盡○く○し○、人○に○過○

○附 葛藤

きたるの智見を具して、よく人を教へ、衆に超えたる識量ありて能く衆を導くべし

と、道元和尚も亦這般の語を以て人に教ゆ、山に登らば須く頂に到るべし、海に入らば須く底に到るべし、山に登て頂に到らざれば宇宙の寛廣を知らず、海に入て底に到らざれば滄溟の淺深を知らず、既に寛廣を知り、又淺深を知れば一躍に四大海を蹋翻し一推に須彌上を推倒せん

と、學人須らく此の氣力を要す。彼の僅に麓に達して我が事成れりとし、僅かに汀に立ちて我が業達すとするもの、焉ぞ能く大道の源底を徹せん。

文字禪終



明治四十四年三月廿六日印刷
明治四十四年三月卅日發兌

文字禪奥附
正價金五拾錢

咄堂小品

著作者 加藤熊一
發行者 伊東芳次郎

東京市神田區鍛冶町八番地

東京市神田區鍛冶町八番地
電話本局八八四番
總發東京二七二番

東亞堂書房

印刷者 山田英二

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

特大賣捌 東京神田表神保町 東京堂書店
大阪北渡邊町 杉本梁江堂
名古屋市本町 川瀨書店
久留米米屋町 菊竹金文堂

東亞堂出版圖書大賣捌所

東京日本橋 同日本橋 同日本橋 同京橋 同京橋 同京橋 同神田 同神田 同神田 同神田 同神田 同神田 同麻布 同本郷

至誠堂 北隆館 林平次 文林堂 目黑店 前川書 東海堂 上田屋 武藏屋 勉強堂 崇文館 二松堂 日本文書 森江書店

同小石川 京都市 同 同 同 神戶市 名古屋市 同 岡山市 廣島市 同 下關市 熊本市 同 鹿兒島

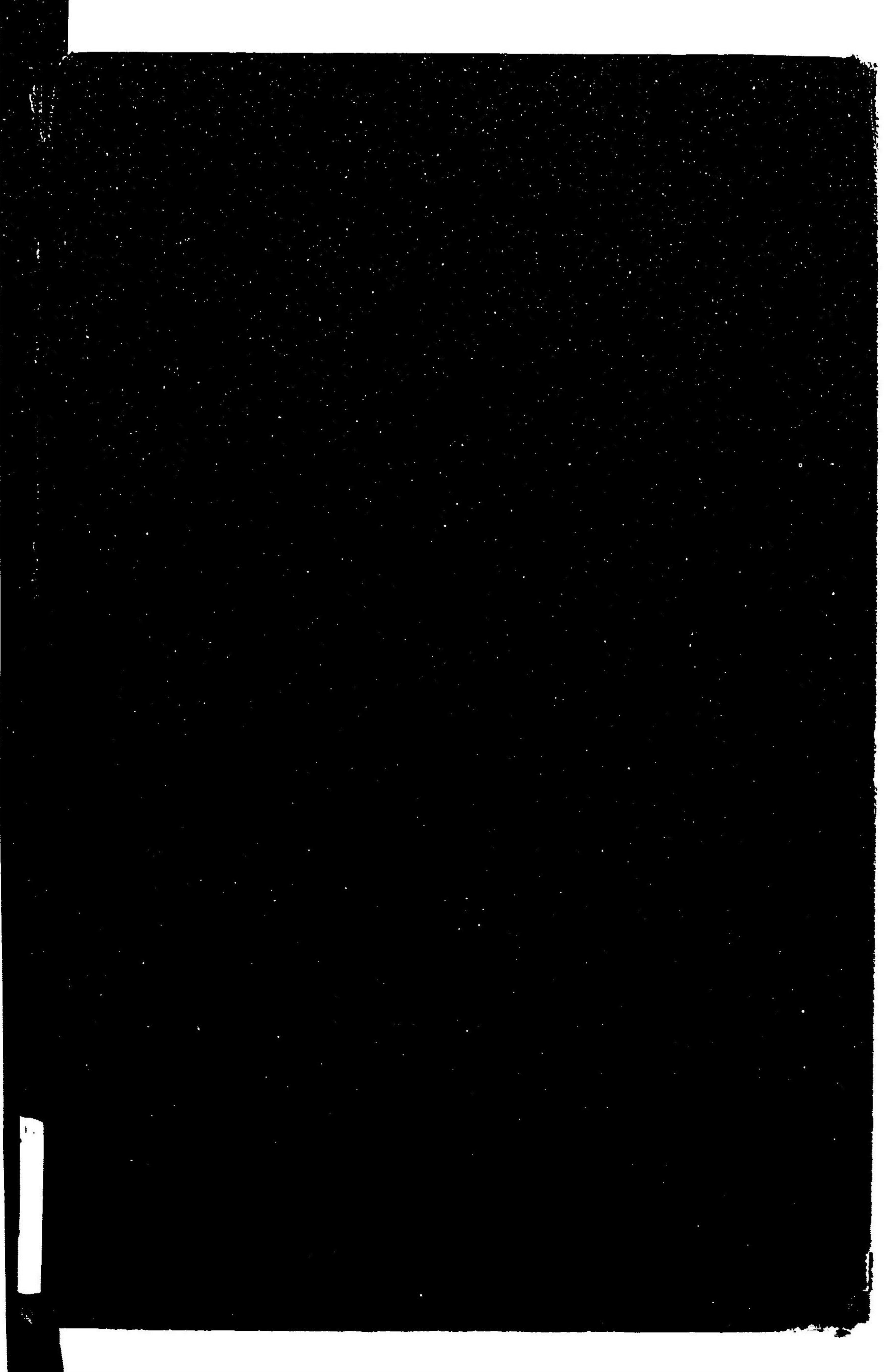
鷄林堂 若林書 寶文館 東技書 寶文館 小澤架 星野星 山陽會 友田書 積善支 上文山 長崎書 金書堂 谷村書

大分市 博多市 長野市 松本市 長岡市 新潟市 金澤市 札幌市 小樽市 弘前市 青森市 宇都宮 朝鮮京城 濟南大連

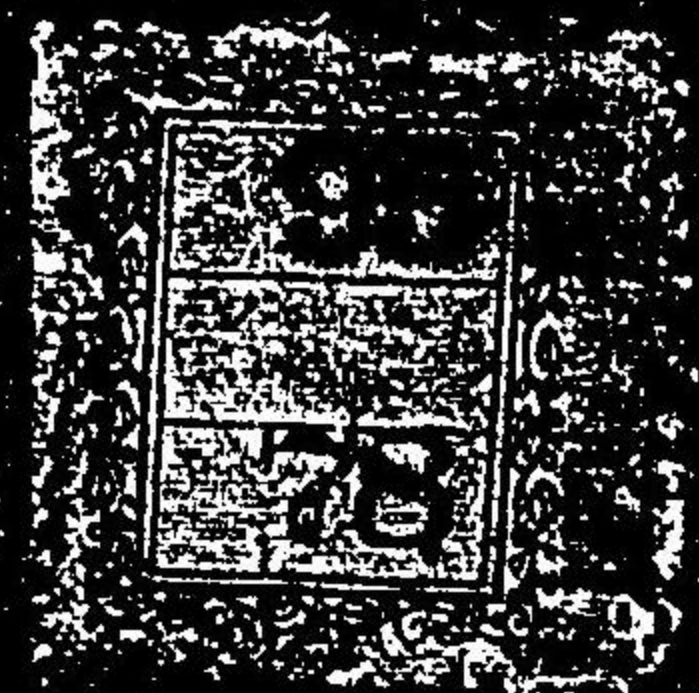
東亞堂出版圖書大賣捌所

甲斐治平 博文社 西澤書 水琴堂 目黑書 萬松堂 宇都宮書 富貴堂 白鳥書 今泉書 今泉支店 內山集英堂 日韓書房 大阪屋書房

951
78



1



019865-000-4

95-78

文字禪

加藤 咄堂/著

M44.3

ABG-0697



